

2022年8月21日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 10 章 13～16 節

説教題：子どものように

私が教員を辞めて牧師になりたいと思ったのには、いくつか理由があるのですが、その1つは、ある教会で出会った12歳の女の子の信仰に触れたことです。前にもお話したと思いますが、その頃、私は学校で6年生を担当していて、女子のグループの対立のようなことで—（「1人ひとり、みんな良い子なのに、グループになると難しいな」と）—悩んでいました。そんな時、その女の子が「教会学校で聞いたんだよ」と言ってこう話してくれました。「天国の私のお家は、私が生きている間にしたことが材料になって出来ているんだって。だから神様の喜ばれることをたくさんするんだ」。私は、「皆がこんな思いを持ってくると、女の子達の学校生活も変わって来るのだけどな」と思ったのです。子供の心、良さを支える神様の力、信仰の力を感じました。「子供達に神様のことが語れたらな…」と思った、それが牧師になることを考える切っ掛けの1つでした。

今日の箇所に「子どもたち」が登場します。この「子どもたち」という言葉は、聖書学者によれば「0歳～12歳くらいの子供達」を指すようです。「12歳の子供達」と聞いて、当時の様子を思い出すことです。

さて、この箇所を中心になるのは、15節「まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません」(15)のイエス様の言葉です。イエス様が大事なことを言われる時の決まり文句—（「まことに、あなたがたに告げます」という言葉）—が入っていることから、それが分ります。

まず「神の国に入る」とは、どういうことかと言うことですが、それは「今この世に在って、神との関係に入る、神の恵みの支配下、保護下に入る」、そのような意味です。その「神との関係」が私達を守ります。私達に神の恵みを経験させます。その関係が、死の壁を打ち破って、私達を天国に運びます。ですから「神の国に入る」、それは私達にとって最も大切なことです。ところがイエス様は、「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません」(15)と言われます。「神の国に入ることが出来ない」、これは重大なことです。私達は「子どものように神の国を受け入れる…」ということがどういうことなのか、どうしても考えなければなりません。

ある時代の、ある人々は、この言葉を「子供のようにはしゃぐことだ」と考えて、「子供のようにはしゃぎ、子供のようにはしゃいだ」と言われます。もちろん、それは間違った考え方です。では、「子どものように…」とは、どういうことなのでしょう。

それを考えるために、全体を見てみたいと思います。イエス様は、初期のガリラヤでの宣教を終えて、今や十字架に架かるためにエルサレムに行こうとしておられます。エルサレムに向かうイエス様は、ガリラヤで為さったように「人々に神様のことを語ったり、癒しを為さったり」、そのようなことよりも、むしろ「自分が地上を去った後に、自分に代わって神の福音を宣べ伝えて行くことになる弟子達を訓練すること」、そこに活動の重点を置いておられました。そんなイエス様一行のエルサレムに向かう旅の道すがら、ある人々がイエス様の噂を聞いて、子供達を祝福してもらうために、イエス様のところに連れて来ました。親は子供の祝福を願います。当時の人々は「イエスのように霊的な力のある先生が現れると、子供を連れて行って、手を置いて祝福してもらう」、そのようなことを普通にしていました。この人々も、そのような素朴な願いを持って子供達を連れて来たのです。ところがイエス様の弟子達が、彼らを叱って追い返そうとしたのです。弟子達は、イエス様が十字架に向かっていることはまだ知りません。しかし、何か緊迫した雰囲気は感じている。イエス様の顔にも疲れの色が見えていたかも知れません。それで彼らは、「子供の出る幕じゃない、子供なんかのことでイエス様を煩わせるわけにはいかない」とイエス様を煩いから守る

うとしたのだと思います。しかし、その様子を見ておられたイエス様は、憤られたのです。14 節の「憤った」という言葉は、非常に激しい言葉です。なぜ、イエス様は憤られたのでしょうか。

2つの理由があったと思います。1つは、イエス様が地上に来られたのは、神の祝福を人々に運ぶためです。「祝福」、日本語では何となく抽象的な、もう一つ掴みどころのない軽い言葉のような気がします。しかし聖書の信仰では、「祝福」というのは非常に重い言葉です。一旦「神の名」によって為された祝福は、もう取り消すことが出来ない（取り消されることがない）、その祝福に、神は真実を尽くして答えて下さるのです。その祝福は、人生を支えて行くのです。

12歳というと、水野源三さんのことも思います。水野さんは、小学4年生の時に集団赤痢によって脳性マヒになり、手足の自由と言葉を奪われ、瞬きしか出来なくなるのです。一時的に片言を話せる時があったそうですが、その時に彼の口から出る言葉は、「死ぬ、死ぬ」という絶望的な言葉だったのです。その彼が12歳の時、1人の老牧師が彼を訪ねて来て、聖書を置いて帰るのです。その聖書を、12歳の少年が、お母さんに手伝ってもらいながら貪るようにして読んだのです。聖書に触れ、そしてイエス・キリストの救いを知った時、彼は変わるのです。暗く、投げやりだった態度が、一変するのです。やがて洗礼を受け、瞬きで言葉を1語、1語を表現しながら、神を讃美する素晴らしい詩を作る人になるのです。水野さんがこんな詩を作っています。「神様の大きな御手の中で、かたつむりは かたつむりらしく歩み、蛍草は蛍草らしく咲き、雨蛙は雨蛙らしく鳴き、神様の大きな御手の中で、私は私らしく生きる」（水野源三）。「神との関係」に入った人を、神様は真実に世話を下さるのです。どんな状況に置かれようが、「私は私らしく、自分らしく生きる」力を、恵みを下さるのです。水野さんは、生涯、神の恵みに生かされて、素晴らしい証しを残して、天に帰って行かれました。いずれにしても、聖書の信仰では、「祝福」は、そういう重い言葉です。現実的な幸いです。イエス様は、神の祝福を人々に運ぼうとされました。そのイエス様の祝福に与ろうと、子供達が連れて来られたのです。イエス様の目には重要でない人等はいない。だからイエスは「祝福しよう」と立ち上がられたのではないのでしょうか。その道を、弟子達が遮ってしまったのです。人々を祝福するために一生を生きられた方が、それを遮られた時に心の中に湧き出したのが、この時の憤りだったのではないかと思います。

しかし、もう1つの理由は、「イエスがこの時、弟子達を訓練することに重点を置いておられた」、その文脈で考えると、イエス様は、このことを通して弟子達に何かを教えようとしておられるのです。それは何なのか。弟子達は、イエス様を煩いから守ろうとしてこの人々を叱ったのでしょうか。しかしその時、イエス様は、弟子達の心の奥に何を見ておられたのでしょうか。弟子達は、「自分達はイエス様に近い」と思っていたと思います。そして「その近さによって子供達を追い払うことが出来る」と考えていたのではないのでしょうか。しかし、そこに人間の罪の姿があるのではないのでしょうか。それは、「自分達はイエス様に近い、イエス様に代わってものを言うことが出来るのだ」という、いわば上から下を見下ろす意識です。しかも彼らは、子供達のことを「重要な存在ではない」と考えた。そう考えて追い返そうとした。弟子達は無意識だったかも知れませんが、そこには—（たとえささやかなものでも）—イエスが嫌われた権力者意識の姿があったのではないのでしょうか。だから「メッセージ記」という聖書は、14節の「妨げてはならない」（14）を「彼らと私の間に立つな」と訳しています。「私に代わって上からものを言うな」ということでしょう。

しかし、それはさらにこう言い換えることも出来ます。この後、10章35節からの個所で、弟子のヤコブとヨハネの兄弟がイエス様のところにやって来てこう言います。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの1人をあなたの右に、もう1人を左に座らせて下さい」（マルコ10:37）。彼らは、イエス様が十字架に向かっておられることを知りません。エルサレムに向かうイエス様のことを「いよいよ天下取りに動き始められた」と思っていたでしょう。だから「あなたが王様になった時には、私達を右大臣と左大臣にして下さい」と言ったのです。しかしイエス様は、その彼らにこう

言われます。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」(マルコ 10:43~44)。イエス様が弟子に求められたのは、「仕える者になれ」ということでした。この時、弟子達は子供達に仕えてなんかいません。弟子達に子供達に仕える思いがあったなら、このように彼らを退けることはなかったはずで、彼らの姿は「仕えること」を忘れた姿です。

カナダで出会ったご高齢のご夫妻の話を良くしますが、このご夫妻が日本から来ている留学生の世話を良くしておられました。私は「良くされるな…」と、それくらいの気持ちで見えていました。そうしたらある時、「私達は学生さんに仕えなければならないんじゃないか」と言われました。「学生さんに仕える」という言葉は、私にとって衝撃でした。私には「親切にする」とか「手助けをする」という視点はあっても、「仕える」という視点はありませんでした。「仕える」というのは、勿論、何でも「ハイハイ」と言うことを聞くことではありません。それは、その人の祝福になることを考え、関わって行くことだろうと思います。しかしいずれにしても、「仕える」ということは、「下に立つ思い」がなければ出来ないことです。でもイエス様は「仕える者になれ」と教えられたのです。

さて、そうすると最初の問題に戻りますが、「子どものように—(神の国を受け入れる)—とはどういうことでしょうか。少し話が逸れますが、あるところで家庭集会をしていた時、この個所の学びだったのだと思いますが、参加者の方が言われました。「イエス様が『子供が純粹で、その心がきれいなので、子供のようになれ』と言われたのだとしたら、家の子供や親戚の子供を見ていて、どうしても純粹だとは思えないので、今まで混乱していました」。ここに連れて来られたのは、申しあげたように、乳飲み子だけではない、12歳くらいまでの色々な年齢の子供達だったのです。12歳、小学6年生です。子供達なりに人間関係の問題を抱えています。対立したり、「いじめの問題」に巻き込まれることもあるかも知れない。その意味でイエス様はここで、子供達が純粹だから「その子どものようになれ」と言われたのではないと思います。聖書も、そのような意味で子供を讃美はしません。そうするとイエスが「子どものように…」と言われた言葉を、どのように受け止めればよいのでしょうか。

ポイントは、「子どものように『神の国を受け入れる』」という言葉です。ここで、人々は子供達を連れて来ました。子供達の側からすれば、ただ連れられて来たのです。受身です。そして、ただイエス様の祝福を受けるのです。繰り返しますが、私はここで「子どものように…」と言われているその一番のポイントは、「誰かに連れられて来て、弟子達に追い払われ、でもイエス様によって祝福をされた」、その「受身の姿勢」というか、ある意味で自らを虚しくしている姿勢、そこにあるような気がします。神の国には「自分は、これこれが出来、こんなに頑張った、努力した」、そういう在り方で入るのではないです。あるいは、弟子達のように、「自分はイエス様に近い」、そのような自負をもって入るのでもないのです。弟子達は、「自分達はイエス様の弟子であり、家も、仕事も、何かも置いてイエス様に従っていて、自分達ほどに神の国に入るに相応しい者はいない」、そう思っていたかも知れません。しかし、その考え方こそ、イエス様を憤らせた考え方なのです。

「一生懸命努力して、頑張って、良い人になって、義しい人になって、神の国に入るに相応しい人になって、神の国に入る」、分かり易い考え方です。しかしそれは、福音—(イエス様がもたらして下さった神の国に入る方法)—ではないのです。

もし、それが神の国—(神の御手の中)—に入る方法なら、イエス様は命を捨てて十字架にお架かりになる必要ななかったでしょう。弟子達が「何にも出来ない子供なんかのことで…」と子供達を追い返そうとした、そこには、イエス様がこれから私達のために十字架に架かれる、その十字架の意味を根本から否定するものがあったのです。イエス様は「私がこの世に来たのは、この子供のように何も出来ない、何も誇るものがない、そういう者を救うためなのだ」と言っておられるので

はないでしょうか。そしてここが大切なことですが、私達も、神の国—(神の御手の中)—に入れて頂くための功德のようなものは、何もないのです。私達も、ただ神様の憐れみによって罪の泥沼から拾い上げてもらって、罪を赦され、救って頂く、それしかないのです。それ以外に何もない。もちろん、神の御手の中に入れて頂いた者が、感謝して、少しでも神に喜ばれるように生きようとすることは大切でしょう。しかし、救われる—(神の御手に入れて頂く)—ということについて、私達は何も誇るものはないのです。神の国に入るに相応しくない人、それは、「自分は神の国に入るに相応しい」と考え、自分を誇る人です。その人は、結局、イエス様の十字架を必要としないのです。

先程、イエス様は「仕える人になれ」と言われたと申し上げました。それは、頑張っただけでそうなるのではないのです。それは、「自分には何もない、ただ神に拾い上げてもらった、憐れんで救ってもらった」、その意識の表れとして出て来る姿勢であり、そのことに感謝して、「少しでも神の御心に適うように生きていきたい」と思うところから出て来る姿勢なのです。「本当に自分には何もない、ただ憐れんでもらい、救ってもらった」ということを思う時、そういう姿勢に導かれるのではないのでしょうか。ある本に「(宗教改革者)ルターは、その最期に『自分は乞食だ』と言った」と書いてありました。「ただ憐れみを施してもらえない乞食、神様の憐れみを頂くしかない乞食」です。その意識こそが、「子どものように神の国を受け入れる」者の姿なのではないのでしょうか。

イエス様は、子供達をご自分から遠ざけようとした弟子達に激怒されました。人には、神の祝福が必要なのです。神との関係が必要なのです。神の祝福があれば、瞬きしか出来ない人が「私は私らしく生きる」と胸を張って、喜びをもって、言うことが出来るのです。その祝福を、イエス様は子供達に与えたいと思われたのです。その祝福を、イエス様は私達にも与えたいと願っておられるのです。いや、与えたいがために、これからエルサレムに上って、十字架に架かって、この罪ある私達が、何もない私達が、それでも神の御手の中に入ることが出来るようにして下さいなのです。私達も、心を虚しくして、ただ神に憐れんで頂くしかない者であることをしっかり覚えて、神の国に入れ直させて頂きましょう。それが人生の祝福、いや永遠の祝福に与る方法です。

最後に御言葉をお読みします。「詩篇 131 篇」です。「主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように御前におります」(詩篇 131:1~2)。